

ザクロ

牧 幸 男

梅雨の頃、緑深の葉の中で咲くザクロの花の深紅色のコントラストすばらしい。王安石(1021～1086)が「万緑叢中紅一点」と表現したように自然の造形の見事さに感心する。しかし、ザクロの季節は、果実が目立つ秋が最も相応しいと私は思っている。ひょろりと伸びた小枝の先端に、黄赤色の果実が秋空に映える姿は、季節の風物詩であろう。果実は秋風に揺らめくが容易に落下せず、熟するに従い厚い果皮が割れ、沢山の淡紅色の粒がぎっしり詰まった種子が現れる。よく観察すると、中には白い隔壁があり、それに沿ってきれいに種子が並んでいる。最近、この実を食べる人もほとんどいないので、冬の季節になっても、しなびたザクロの実が梢にぶら下がる姿が見られる。時代の流れであろうが、なんとなく寂しい気持ちになってしまう。ザクロの種類を大別すると、一般に花が一重でよく結実するものを「実ザクロ」と呼び、八重咲きで実を結ばない品種群を「花ザクロ」と呼んでいる。



子供の頃、我が家の庭に大きなザクロの木があり、果実が実ると種子をよく口に含んだものである。口に含んだ種子から果汁のみ吸引し、種子を吐き出すのである。口の中には酸味だけが残し、おいしいと思ったことはなかった。「ザクロの味は、人の肉の味と同じである。食べても決しておいしいものではないことが分かるであろう。」と教えてくれた母の姿を今でもはっきりと覚えている。母親から教わった人生の教訓であるが、この真意を理解したのは大人になってからである。

ザクロは通常庭園に栽培される落葉高木で、高さ10m以上に成長する。枝はよく分枝し、短い枝にはトゲがある。材は黄色、葉はほぼ対生し短い葉柄があり、長倒卵型で艶がある。



ザクロの果実（スペイン）



ジュース用ザクロ（スペイン）

一方、我が国ではザクロは果実としての地位を確保してないが、気温の高い地域ではザクロは重要な果樹として、古から栽培されてきた。原産地はイラン、アフガニスタン、インド西北部で、人類にとってブドウと共に最も古くから親しまれてきた果実である。古代エジプトでは、死者が復活するまでの間の食べ物に困らないようにと、食料品をお墓の壁画に描いていたが、その中にザクロも描かれていた。欧州へはギリシア時代（BC9～4世紀）に渡り、中国へは前漢の武帝（BC156～BC87）の時代、皇帝の命を受けた張騫（？～BC114）がペルシアから持ち帰ったのが最初とされている。

わが国への渡来は『本草和名』（918）に「安石榴 和名佐久呂」の記述、『和名抄』（932）に延長年間（923頃）中国から、朝鮮石榴は享保九年（1724）韓国からもたらされた記録がある。鎌倉時代（1192～1333）になるとザクロはかなり普及していたらしいが、利用目的は、薬用と工業用（金属性の鏡磨）が主であり、江戸時代から大正時代の間は、庭木より盆栽鑑賞が盛んであったようだ。このような経緯から、果実の改良はわが国では殆ど行われなかった。このためわが国のザクロの味は酸味の強いものが主で、輸入品のような甘いものはなかった。わが国で栽培される主な品種は「観花種」は朝鮮石榴、姫八重、白獅子、「観葉種」は葉斑姫、鹿の子、「採果種」は水晶石榴、天津大実などである。詩歌の対象になるのは、明治以降となる。

秋空^{あけ}に 朱きわまれる 実石榴を 見据えみにしか この朝あけて 木俣修

喰わねども 石榴興^{たいぎ}ある 形かな 太祇

植物名の由来は、石榴の音に基づくと牧野富太郎博士は述べ、漢名は安石榴を当てている。また、石榴を当時日本ではジャクリュー、ジャクルーと読み、徐々にこれが訛り活転化して「ジャクロ」から「ザクロ」になり、一般に普及し和名になったとも言われている。漢名に

ついでに、中国渡来時のペルシアが安息国、あるいは安石国と呼んでいたもので、漢の武帝の時代西域に派遣されていた張騫ちやうけん (?~BC114) が帰国する際に持ち帰ったと言われている。この時果実の形が瘤に似ているので榴と書き、安石国から渡来したので「安石榴」略して、安榴や石榴しやりゆう、樹榴じやくりゆう、丹若、安榴、拓榴になった。学名はPunica granatumで、属名はpunicus (カルタゴ) の意ザクロを北アフリカのカルタゴ原産見ていたことによるか?種小名は粒状の種子が多い意味である。

ザクロは古い時代からヨーロッパ等では生活に密着してきたのでさまざまな分野に応用されえた。果実は生食やジュース、果実酒、銅鏡の曇りを防止、根や花、樹皮を薬用に利用してきた。

このように人類にとって常に身近な果実であったためか、次第に東西の宗教に採用されるようになった。理由として考えられるのは、果実に種子が多いので子福と豊穰になぞらえ、永遠の生命のシンボルと考えたのである。それが、希望と不死を表す神聖な果実とみなされるようになり、ギリシア神話やローマ神話、エジプトの宗教、アッシリアの宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、

仏教など多くの宗教に神聖な果物として取り上げられるようになった。中国でも多産の証であり、子宝に恵まれるよう神に捧げる風習が残っている。マホメッドは「ザクロを食べる。嫉妬と憎しみの心を追放する。」と述べている。この言葉から、わが国の酸味の強いザクロと彼の地のザクロの味の違いが分かる。

わが国のザクロの味と人肉の味の伝承に、次のような教えがある。「訶梨かりていも帝母はもと千人の子を持つ鬼神で、初め人の子を捕らえて食べてしまう女神であった。子を略奪された親たちの恐れと悲しみに筆舌に尽くせないほどで、お釈迦様に助けを求めた。仏陀はこれを哀れに思い、鬼子母神が最も可愛がっている末の子を法衣の裏に隠された。子が一人足りないことに気づいた鬼子母神は気が狂わんばかりになって昼夜の別なく捜したが見つからず、お釈迦様におすがりした。この時仏陀は「お前は千人の子供のうち、一人を失っただけであるから、少しも騒ぐことはあるまい」と言われた。これを聞いた女神は「仏は慈悲深い方と聞いていたのになんと言われているのですか。何人いても子の可愛さは同じです。この世の中に我が子がいなくなって心の狂わない者がいるでしょうか」と怒り叫んだ。仏陀は穏やかに、しかも厳として「お前は千人のうち一人の子供を失ってさえそのように嘆き悲しんでいるが、お前に数少ない子供を食べられた親屋の心情を一度でも考えたことがあるか」と諄々諭された。鬼子母神は初めて夢から覚めたごとく我に帰り、仏法に帰依し、今後一切人肉を断ち、子供を保護するばかりか、産婦の安全、子なき女性に子宝を授けようと誓いさえ立てた。そこで仏陀は隠していた子を返した上で「これからは決して人肉を食べてはいけない。



生薬 ザクロ果皮



生薬 ザクロ種子

もし、人の肉が欲しくなったら味が人肉に等しいと言いついこの実を食うが良い」と言われ、ザクロの実を与えたとする。

この伝説は多くの方々に膾炙されているが、伝説の原形はインドにあるらしく、元来鬼子母神はサンスクリットではハーリティと言いつい「訶梨帝母」とも音訳されている。彼女は仏教神の一人鬼神の妻であるという。この物語が、母が教えてくれたザクロ物語の原点だった。

薬用の古い利用の記録は、古代ギリシアのペダニウス・ディオスコリデス (40頃?~90) 著『薬物誌』(ギリシア本草) (70) に、樹皮が条虫駆除に有効との記述であろう。漢方では『名医別録』(3~4成立) の下品に「安石榴」の原形で、根は「東行根」(東を向いた根) の原形で収載されている。上品収載の石榴幹皮せきりゆうかんぴは条虫特せきりゆうかんぴに有鉤条虫駆除薬に、下品の石榴根皮ゆうちゆうは虻虫ゆうちゆうの駆除薬の利用と石榴果皮は止瀉として慢性下痢、下血、駆虫薬に応用の記述がある。

我が国では、根及び幹の皮を生薬名「石榴皮」と呼ぶ条虫駆除薬として日本薬局方には初版から第7改正まで収載されていた。また、成熟果実の皮は「石榴果皮」として収斂止瀉、駆虫薬としている。最近では、乾燥種子にエストロンが含まれることが報告され更年期障害や乳癌等に期待されると取引が増えている。

我が国ではもっぱら鑑賞用の花木として栽培され、食用に利用することはない。一方、スペインなど地中海沿岸食区、イランなどの中東諸国インド、中国、アメリカなどでは果樹として栽培され、生食するほか、果汁の販売が盛んである。これらの国では、ザクロを山のように積み、その場で果汁にして販売していた。私も現地冷えたザクロの果汁を良く飲んだが、味は甘くておいしかった。



木質は硬く、床柱や装飾用の柱に用いる。

花言葉は「子孫の守護」、「優美」、「円熟した優美」、「優雅な美しさ」、「愚かしさ」等がある。